

【研究報告（平成 29 年度）】

チーム③ 中高年期の社会活動支援・活力ある高齢者の研究チーム 産学官連携による高齢者活動広域的サポート事業の開発

馬場みちえ^{*)}、宮林郁子¹⁾、吉川千鶴子¹⁾、宗正みゆき¹⁾、大城知子¹⁾、
牧香里¹⁾、石橋曜子¹⁾、上野珠未¹⁾

1) 福岡大学医学部看護学科、*) 責任者

要 旨

2017 年に高齢者サポートに向けて月 1 回、企業検針員 23 名を対象に、2017 年 1 月から 9 月まで 9 か月間、研修プログラムを実施した。結果は、コミュニケーション自己評価表で 2 月は 3.49 点であったのが、9 月は 3.85 点と伸びていた。また、2 月と 9 月でコミュニケーション項目に有意な差がみられた項目は、「聴く姿勢が適切である」「うなづきができる」「繰り返しができる」「相手の気持ちや感情を言葉で確認要約できる」などであった。さらに介入前後でのエゴグラム (TEG II) での評価は、A (ADULT) の項目が上昇した傾向を示した。これらのことから、「コミュニケーションスキル向上をめざした教育プログラム」の有効性が示唆された。今後教育プログラムを洗練し、標準化をめざしたい。

1. 緒 言

近年、地域社会のつながりが希薄となっており、独居高齢者の孤立死などが問題となっている。これらの社会背景から高齢者サポートに一般地域社会人の参入が各地域で行われているものの、確固とした継続できるスキルおよび育成プログラムに関する研究は少ない。

そこで、私たちは看護学科の視点で「健康」「ケアというまなざし」を持ったコミュニケーションスキル育成プログラムを企業社員に研修することで、企業社員が自治体と連携をしながら地域高齢者の社会参加促進と見守りなど広域的高齢者サポート事業を実施したいと考えた。

2017 年は、高齢者サポートに向けたコミュニケーションスキルを高めるための研修プログラムを開発、評価したので報告する。

2. 方 法

2017 年 1 月から 9 月に西部ガス・カスタマーサービス株式会社西営業所検針員 23 名を対象とし、コミュニケーションスキル向上の研修を

実施した(表 1)。介入前に検針員が高齢者サポートについてどのような認識を持っているのか、①インタビュー調査を行った
検針員のコミュニケーションスキル向上の評価方法は、②毎回のコミュニケーション自己評価 12 項目 (5 件法)、③介入前後のエゴグラム調査をアンケート形式で実施した。

3. 研究結果

1) 介入前検針員の高齢者サポートへの認識

西事業所検針員に対して高齢者サポートについてインタビューしたところ、「声をかけたり、会話してみたいと思う」や「高齢者を助けたいと思う」などの肯定的な発言はあるものの、「深くは入れない」「困難感や不安感がある」など否定的な発言がみられた。

2) コミュニケーション自己評価

図 1 に月別に 12 項目の平均点を示した。2 月は 3.49 点であったのが、9 月は 3.85 点と伸びていた。5 月と 8 月で低かったのは演習時間が短かったためである。

図 2 には 2 月と 9 月でコミュニケーション項

目に有意な差がみられた項目を示した。「聴く姿勢が適切である」「うなづきができる」「繰り返しができる」「相手の気持ちや感情を言葉で確認要約できる」などであった。

3) 介入前後によるエゴグラム調査

図3に示した。介入群(20名)に対して、介入前後でのエゴグラム(TEG II)で評価した。A(ADULT)の項目が上昇した傾向を示した。

4. 考察

2009年開始した看護学科学生の「ひとりぼっちゼロ作戦」に端を発した本事業は、他者への関心を地域にいかを広げるかである。学生の活動が地域で受け入れられるニーズが高いことから、看護の知を生かして、地域をベースに働く検針員を対象に、高齢者ケアサポートに実現に向けてコミュニケーション教育プログラムを開発、実施、評価した。

コミュニケーション研修を受けることにより、「聴く姿勢」「うなづき」「繰り返しができる」などのコミュニケーションスキルが介入前より高くなった。これは、相手の話を意図的に聴くという態度や姿勢がとれるようになったことを示している。また、エゴグラムのA(Adult)が介入前より高くなったことは、本プログラムにより高齢者への関心が高まり、自分や相手を冷静に客観的に観る力が強化されたと推察される。

看護は、個人、家族、組織、地域を対象とする。地域をフィールドにする職業に限らず、看護の知を生かしてケアマインドを育む教育的役割を担うことで、人への関心を高め、共に支えあう社会に貢献できることが示唆された。

5. 産学官連携で看護学科が貢献できること

- 1) 地域が持つ能力を引き出し活性化をはかるには「産」と「学」がつながることで、「官」(政策)を動かすシステムが必要である。
- 2) 産学官が連携して地域で高齢者ケアサポートを実施・継続できるシステム化において、看護

学科は看護の知を生かして、有機的な繋がりof 要としての役割が期待できる。

5. 結論

1) 2017年度事業で「コミュニケーションスキル向上をめざした教育プログラム」の有効性が示唆された。今後、教育プログラムを洗練し、標準化をめざす。

2) コミュニケーションスキル向上は、他者への関心を高めることが明らかになった。他者への関心が、個人、家族、地域へと広がることにより、産学官が連携した高齢者サポートの実現に繋がる。

3) 本事業は、学問としての看護の知を地域に生かす取り組みである。ケアマインドを育む教育的役割を担うことで、人への関心を高め、有機的な繋がりof 要として、共に支えあう社会に貢献していきたい。

現在2018年1月から西事業所による高齢者サポートへの参入と、作成したテキスト冊子による本格的に西部ガス・CS九州地区検針員全員に対してコミュニケーション研修を開始している。2019年度からは他企業、自治体への研修・実施システムを拡大・開発し、平成32年度には、質の高い高齢者サポートモデル、福大方式の確立をめざしている。

6. 研究発表

学会発表

- 1) 石橋曜子、上野珠未、馬場みちえ、吉川千鶴子、宗正みゆき、大城知子、宮林郁子. 地域企業による地域高齢者ケアサポート活動に向けた認識と自己効力感(第1報). 第37回日本看護科学学会. 2017
- 2) 上野珠未、馬場みちえ、石橋曜子、吉川千鶴子、宗正みゆき、大城知子、宮林郁子. 地域企業による地域高齢者ケアサポート活動に向けた認識と性格傾向(第2報). 第37回日本看護科学学会. 2017
- 3) 馬場みちえ、宮林郁子、吉川千鶴子、宗正みゆき、大城知子、石橋曜子、上野珠未. 地域包括ケアシステムに向けた産学官連携による地域高齢者ケアサポートの開発. 第37回日本看護科学学会. 2017

表1 2017年高齢者サポートに向けたコミュニケーションスキル向上プログラム

時期	中心テーマ	方法	評価方法
1 1月 180分	1)産学官連携での目標の理解 2)地域高齢者の現状と制度、問題点を共有 3)コミュニケーションとは何かを知る	講演 コミュニケーション講話・技術演習	コミュニケーション自己評価表 全社アンケート前
2 2月 90分	コミュニケーションの楽しさを知り、難しいものではないことを理解する	コミュニケーション講話・技術演習	コミュニケーション自己評価表 付録アンケート
3 3月 180分	1)「高齢者とは」を理解する 2)コミュニケーションの基本(傾聴)を知る	高齢者疑似体験 コミュニケーション	コミュニケーション自己評価表 アンケート
4 4月 180分	1)地域高齢者の認知症について考える 2)コミュニケーションのパターンを知る	認知症講話 コミュニケーション	コミュニケーション自己評価表
5 5月 180分	1)孤立死防止についてできることを考える 2)コミュニケーション方法について理解する	孤立死防止講話 コミュニケーション	コミュニケーション自己評価表
6 6月 180分	1)地域で生活する高齢者で、家族以外の高齢者に対して自分たちに何が出来るか考える	公民館実習 高齢者ふれあいサロン	コミュニケーション自己評価表
7 7月 180分	1)ケアサポートにあたっての倫理を考える 2)自分たちが出来るサポートを具体的に考える	グループワーク コミュニケーション	コミュニケーション自己評価表
8 8月 180分	1)家族とは何かについて考える 2)コミュニケーション「対話」技法を理解する	家族とは コミュニケーション	コミュニケーション自己評価表
9 9月 180分	救える命について考える	消防署救急救命講習	コミュニケーション自己評価表
11月	学んだコミュニケーションスキルをもって地域高齢者へのケアサポートの意識づけができる	終了式	全社アンケート後

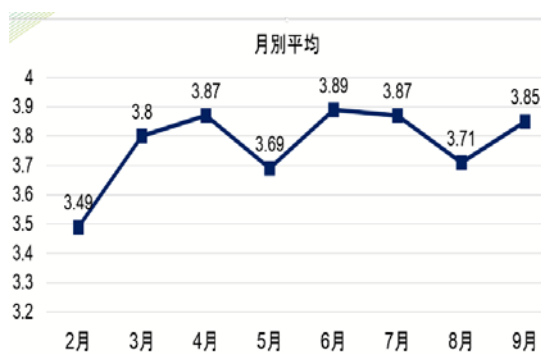


図1 月別コミュニケーション評価の推移

	介入前	介入後	p
CP	10.3	10.4	n.s
NP	14.6	14.0	n.s
A	8.8	10.3	n.s
FC	12.8	12.7	n.s
AC	9.1	9.5	n.s

Aとは心理的なAdult(大人)の程度を表す。

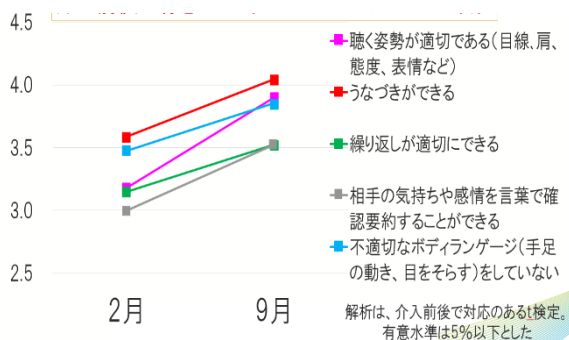


図2 介入前後で有意差があるコミュニケーション項目



西部ガス・CS 西事業所研修終了後記念撮影



ひまわりサポート
記念ピンバッジ